

# 肉筆浮世絵の研究

— MOA 美術館蔵 重要文化財「婦女風俗十二ヶ月図」勝川春章筆の想定復元模写を通して —

向井 大祐（東京藝術大学大学院）

## 1. 研究概要

本研究は MOA 美術館蔵 重要文化財「婦女風俗十二ヶ月図」勝川春章筆（以下、MOA 美術館本）を取り上げ、先行研究をふまえて制作当初の MOA 美術館本の想定復元模写を制作した。実際に模写制作を行うことで得られる絵画の技法、構成面からみた実技的な見地と、作品形態の復元による当初の鑑賞形態の考察を通して、肉筆浮世絵における MOA 美術館本の位相の再検討を行った。

## 2. 肉筆浮世絵と勝川春章

浮世絵は世界でも例を見ない独自の発展を遂げた芸術であるが、その芸術的評価においては大量生産品である版画が一点制作の肉筆画に勝るというユニークな逆転現象を生み出した。それは浮世絵の本質が大衆芸術であり、町人の需要に対して大量生産が可能な版画が、まさに浮世絵の独自性を体現した表現様式であったからだ。しかし浮世絵師は版画とともに一点制作の肉筆画も精力的に制作しており、版画と肉筆画の二つの方向性はお互いに作用を与えて浮世絵の芸術性を発展させてきた。

江戸時代中期の明和から寛政年間（1764~1801）にかけては多色摺の版画、いわゆる錦絵の隆盛により浮世絵芸術はひとつの黄金期を迎える。版画、肉筆画ともに質の高い優れた作品が数多く生み出された注目すべき時代である。錦絵の発展とともに浮世絵の主流は次第に版画へと移っていくが、その転換期にあって肉筆画による数多くの傑作を遺した浮世絵師として、第一に勝川春章（1743~1792）の名前が挙げられる。江戸時代中期に活躍した数多い浮世絵師の中でも、版画と肉筆画の両面で活躍した春章は稀有な存在である。

春章は、はじめ土佐派の流れを汲む肉筆画専門の宮川春水に学び、明和初期に歌舞伎の役者絵版画を発表し、類型化された旧来の役者絵に写実性を加味した画風で人気を博した。主に役者絵版画という分野において勝川派は



版画の作例：  
「東扇」勝川春章（東京国立博物館）



肉筆画の作例：  
「竹林七妍図」勝川春章  
（東京藝術大学大学美術館）

一家を成したが、春章はその晩年には版画による表現から離れ、肉筆画に専心しその芸術性を開花させた。春章の技量は肉筆画における描線、色彩の可能性を最大限に引き出し、その繊細優美な美人の表現は浮世絵という俗の中にあって高い品性を備えている。

### 3. 研究作品について

本研究作品の MOA 美術館本は重要文化財の指定を受けており、春章の代表作であるとともに肉筆画の第一級の名品として殊に高い評価がなされてきた。十二ヶ月の月次風俗の画題を美人画として置き換えたもので、柱絵を意識した縦長の画面にそれぞれの月の風俗が巧みに構成されており、描写の細やかさにおいては他の作品の追隨を許さないものとなっている。肥前平戸藩主松浦家に伝来したとされるもので、戦前中野忠太郎氏の有に帰し、戦後になって静岡の熱海美術館（現 MOA 美術館）の所蔵となり現在に至っている。「風俗十二ヶ月図」という作品名の通り、本来は十二図の揃いものであったはずであるが、早い段階で一月と三月の二図が失われたと考えられ、後年に制作された歌川国芳（1797~1861）による補作である「三月 潮干狩」を含めると十一幅が現存している。この一月と三月の図を欠いた経緯については不明な点が多く、古くから未完説が出されることもあるが、十二ヶ月のそれぞれに付属した書聯全十二幅が現存しており、その存在を考慮すれば当初は十二図の揃いものであったことは確かである。また作品の形状は現在十一図（国芳の補作を含む）全て掛軸装となっているが、過去の表装形態は六曲一双の屏風であったとの記述が確認され、その場合やはり十二図が屏風として備わっていたものと考えられることができる。同じ月次風俗を扱った春章の作品には千葉市美術館蔵「婦人風俗十二ヶ月図」（以下、千葉美術館本）があり、こちらも現存するのは四幅のみであるが、元々は十二図が揃った押絵貼り屏風であったと推定されている。いずれも図の散逸または欠失による表装形態の改変であるが、MOA 美術館本に関しては自由に絵を取り外すことのできる、きわめて特殊な構造の屏風であった可能性も指摘されている。



「婦人風俗十二ヶ月図」勝川春章（MOA 美術館 重要文化財）



## 4. 一月、三月の図の検討

現存しない春章の手になる一月、三月の図の内、特に一月は国芳による補作が行われたか判然とせず、付属する書聯の五言二句の内容から正月の画題であることが分かる程度で、その図様に関しては謎に包まれていた。

本研究ではこれまで言及されることのなかった春章門弟である勝川春潮（生没年不明）の版画作品「風俗十二候」との関連性を検証した。春潮は肉筆画こそ春章の作風に倣った作品を遺しているが、鳥居清長（1752~1815）に強い影響を受けた美人画版画を中心に制作していた。この「風俗十二候」も、その題名から清長の「美南十二候」などの揃いものに連なる作品として見られていた。しかし、改めて海外の美術館に散逸したそれぞれの月の図様を確認したところ、春章のMOA美術館本の図様を転用している可能性が高いことが明らかになった。残念ながら、この「風俗十二候」には三月の図を確認することができなかったため、国芳の補作である「潮干狩」三月の書聯について改めて再検討し、春章が制作した当初の三月の図様も「潮干狩」に関連した画題ではないかと推定した。



(左)「風俗十二候 一月」 勝川春潮（大英博物館）  
(右)「潮干狩」 歌川国芳（MOA美術館）

## 5. 想定復元模写制作

実際に復元図を制作することで版画と肉筆での表現の違い、春章と春潮または国芳との作家性の違いを実技的な見地から明示した。まず失われた一月、三月の図に先行して、現存する十図の想定復元模写を行い、春章の線描、色彩などを学びとった。それらの情報を落とし込む形で、一月と三月の図の想定復元を行った。特に一月の図は版画と肉筆画という違いを念頭に、春章の制作当初の図様にできる限り近づけるように構図、色彩などを検証した。三月の図については、国芳の作風が春章とは作家性、時代性の点で大きく隔たりがあるため春章の作品や関連する浮世絵作品から図様を参照して再構成を行った。

掛軸装以前の屏風装への鑑賞形態の再現については、各扇各図の取り外しができる構造にいくつかの可能性が考えられたが、軸装になる前の写真資料、類似の構造の屏風を参考にした。そして、江戸時代にはけんどん式と呼ばれて



一月（復元）



三月（復元）

いた、建具などの要領で留め具を用いずに取り外せる構造を採用した。屏風になることで全体の有機的なつながりを見せることができ、なおかつ個々の絵画として独立して鑑賞できるという「風俗十二月月図」の特殊な趣向の一例を示すことができたと考えられる。



博士審査展 展示風景

## 6. 総括

本研究の成果として、国芳の補作もない一月の図について、春章の弟子である春潮の作品との関連性を新たに発見できたのは、美術史的な面からも重要な指摘であるといえる。またその図様を基に復元図を制作することによって、師匠と弟子、肉筆画と版画の相関性を実技的な面からも提示することができた。三月の図については「風俗十二候」の未確認の図様を今後も調査する必要があるが、春章の作品や関連する浮世絵作品を参照することで、現段階の研究で想定しうる可能性として作例を提示できた。これら二図の復元図制作は、単に感覚的に行うのではなく、現存する十図の模写を通して蓄積した線描や彩色技法の情報を落とし込むことで、想定復元図としての精度を限りなく高めることができた。

また、制作当初の鑑賞形態である屏風として復元したことで、MOA 美術館本が大和絵の月次屏風の伝統に強く結びつけられていると示すことができた。しかも単なる屏風ではなく取り外しが可能という特殊な構造は、江戸の粋な美意識を反映したものであり、古典の「雅」と当世の「俗」という二つの相反する要素を見事に両立している。春章の芸術表現は「雅俗」という形容詞で語られることが多いが、MOA 美術館本はその芸術性を最も体現した作品であるといえる。鑑賞形態も含めてこの「雅俗」のコンセプトが貫かれているという指摘によって、MOA 美術館本が肉筆浮世絵の芸術表現の可能性を考える上できわめて重要な作品であることを改めて強調できたと考える。